

## 保育園児の調整・仲直り行動における 身体接触到に注目した日英比較検討

早稲田大学大学院 広瀬 美和

### Comparative study of young children's reconciliation and regulation of their relationship at nursery schools in Japan and UK. — Focusing on bodily touch.

Waseda University HIROSE, Miwa

本研究では、英国のナーサリースクール（保育学校）で観察を行い、子どものいざこざが解決される場面を、日本の保育園で観察された解決場面と比較を行った。また、ビデオ分析支援ソフト *mivurix* を用いて英国の保育の特徴を抽出した。その結果、英国のナーサリースクールでは、大人と子どもの区別を明確にし、いざこざには大人が積極的に介入し、解決に導くなど、トラブルをおきにくくする保育を行っていることがわかった。また、当事者間での解決には特に違いはなかったが、当事者でない子どもがいざこざに介入する場合に、日本の他児介入と英国の他児介入には違いが見られた。幼児に対する保育士のかかわり方や、保育スタイルの違いと、子ども達の調整・仲直り行動とが相互に影響を与えていることが推察された。今後その関係について詳細に検討すること、またそれによって、よりよい保育を考えていくことが課題である。

**【キーワード】 調整・仲直り, 保育, 日英比較, 身体接触**

Social conflicts involve a factor that facilitates development of children's social skills. There are factors that help to settle down our emotion in touch behaviors. Young children's touch behavior has a role to resolve peer social conflict. Using *mivurix* that is one of image dissector support software, this study explored Japanese and British children's reconciliatory behavior focusing on touch at a nursery school. The episodes involving touch by a third person were compared between Japanese and British children. The result implies that there might be difference between the two countries: British children intervene in the conflict neutrally, while Japanese children comfort one-sidedly. Future study needs to examine observational data in each culture.

**【Key Words】 regulation and reconciliation, child-care, Japan-Britain comparison, touch**

## 問題と目的

### 保育園における調整・仲直り行動について

けんかやいざこざ等、子どもの社会的な葛藤を論じた研究では、これらの社会的葛藤が、子どもの社会性の発達に寄与していることを、近年明らかにしてきている（荻野，1986；斉藤，1992）。特にいざこざについて論じた研究に焦点を当ててみると、子どもがいざこざ場面におかれた際には、自らが持つ社会的スキルを用いながら、いざこざの解決を志向することが明らかになっている（Shantz, 1987；Sackin & Thelen, 1984）。以上のような知見の含意するところは、子どもの葛藤解決の経験が、子ども自身の社会的スキルの発達を促す要因のひとつであるという点であるといえよう。

乳幼児初期の子どもと大人との交渉では、子どもに対する大人側の配慮が働くため、社会的葛藤が生じる場面に子ども自身が直面することは多くない。ところが、保育園や幼稚園における子ども同士の関係においては、互いに相手の考えや心情、パーソナリティを理解できないことで社会的葛藤が生じるとともに、このような問題解決もまた経験するといえよう。

しかし保育現場や幼稚園教育現場のような実際の場面では、いざこざへの介入の仕方について未だ十分に明らかにされてはいない。子どもの集団をケアしたり教育したりする現場は、種々の状況や場所、参加者によって相互作用の様相が異なる複雑な場であり、保育士にはそれぞれの文脈に応じた柔軟な対応が求められる。そのため、いざこざへの介入の仕方も多様なものとなる。

### 日英比較をすることについて

現在日本では、少子化の進行や家庭や地域を取り巻く環境の変化を背景に、就学前の子どもの教育・保育に対するニーズが多様化している。そのことから、総合施設化に向けてモデル事業の実施や法案提出など、整備が進められている。日本では保育園においても、満3歳以上の幼児に対しては、幼稚園教育要領を基本として幼児教育が行なわれている。日本ではほぼ100%近くの子どもが幼稚園や保育園で就学前教育を受けている状態にあり、そのことが日本の就学後の学習や教育をスムーズにしているとも考えられる。しかし現在、小学校での教科教育への移行の問題、あるいは保育園に子どもを通わせる親の中での幼児教育に対する要望の高まりから、就学前教育のあり方が検討されることが求められている。

一方英国では、5歳になると学校に行き始めるため、日本よりも1年早い就学システムの下で教科教育が行なわれている。このことは、日本ではまだ幼児として扱われる時期に、集団での学びの活動がなされると同時に、その前段階では集団での学びの活動への準備がなされるということにもなる。その就学前児教育は、英国では以下のようにになっている<sup>(注1)</sup>。保育サービスには、デイナーサリー、プレイグループ、チャイルドマインディングや託児所 (crèche) などがある。幼児教育のサービスは、ナーサリースクール、ナーサリークラス、レセプションクラスと呼ばれる施設によって担われている。ナーサリースクールでは、教師と保育資格を持ったナーサリーアシスタントが配置されており、子育て支援などは視野に入れられていないが、保育形態としては、日本において現在モデル事業として行われている幼保園に近い形態をとっているのではないだろうか。

このような状況にある現在、日本がどのように保育・幼児教育を整備していくことができるのかを  
探るためにも、他の形態をとっている文化について知ることは重要であると考えられる。

### 身体接触による調整・仲直り

Morris (1971) や Argyle (1988) は、人間の感覚や人間関係において身体接触が重要であることを指摘している。特に母子間では、母子の相互作用を促し親子関係の絆を形成する上で重要である (Klaus & Kennell, 1982), あるいは乳幼児期の周囲の人間からの身体接触は自然の鎮静剤の役割を果たす (鈴木, 1995) という指摘もある。そういった身体接触の重要性への着目から、カンガルー・ケアやタッチ・ケアといった母子の発達を促す支援も行なわれている (菅野, 2003)。

さらに、根ヶ山(2002)は、母子間の身体接触が子に安心感を与えることに加え、くすぐり遊びなどの身体遊びに見られる情動の共有や、身体の共振をとりあげ、身体接触の重要性を再評価する必要性を主張している。また根ヶ山(2002)は、親子間の身体接触の重要性に加えて、仲間間の身体接触についても述べている。特に身体遊びを取り上げ、仲間間で身体接触を交えつつ楽しく遊ぶことが、社会性の発達に重大な意味を持つとも述べている。

また山口(2004)は、保育園児のなかで、問題行動を起こすとされている子どもに対して、友達同士で手をつないで輪になったり、大人が肩や手によく触れる遊びを取り入れたりするなどの実験を行っている。その結果、実験群では有意に望ましくない行動が低減したことを報告している。接触の欲求が満たされることで幼少期の子どもの心が穏やかになることを主張しているのである。

また、葛藤の調整や解消に関する研究では、サルや類人猿の集団での和解行動として身体接触が用いられていることが指摘されている。そのなかでは約4割が葛藤後に互いの身体を接触しあっていることが報告され、キス、抱擁、毛繕い、優位者の口に指を入れるといった身体接触行動が調整の役割を果たしていることが示唆されている (De Waal, 1993)。

幼児の仲間葛藤の平和的で協同的な解決についての行動学的な検討を行った Sackin と Thelen (1984) は次のように報告している。まず、就学前児の間での葛藤の31%が連合的・親和的な結果へとつながっていた。その和解的な行動の中には玩具の提供、協同的提案、実質的な謝罪とともに、手をつなぐ、なでる、キスをする、抱擁するといった、友好的あるいは援助的な様式で接触する身体的な接触行動が含まれていた。身体接触は特に社会的な攻撃性を緩和するのに効果があるようだ。

一方で、身体的な遊びと攻撃とは非常に区別しにくい特性を持っている。そのような激しい身体的な遊びは、Rough and Tumble play (Smith, 1997) として扱われてきた。実際、保育園等の子どもの間では、レスリングや相撲といった、身体的な接触を伴う遊びが多く見られる。広瀬(2004)の観察では、いざこざの延長のように身体を接触させて取っ組み合いをしていた子どもたちのやり取りが、次第にレスリング遊びに移行していく事例が観察されている。幼児期の子どもたちは、一見第三者からは攻撃と判断されるような激しいやりとりの中で、当事者同士では遊びを成立させている。小山(2003)によれば、当事者間では身体接触中に交わされる筋肉の緊張と弛緩のなかに遊びを伝える要素があるのだ。

前述の根ヶ山(2002)もまた、くすぐりに含まれる接触の快と不快のコンフリクトが、遊びを実現さ

せるとして、単に快感を与えるのみでない接触の感覚の意味について述べている。以上のように、身体接触には、個体の気持ちに慰撫的に働くだけでなく、相手の怒りの状態を計ったり、またその状態によってはその接触自体を遊びにしたり、また遊びへの移行することに利用する側面もあるのかもしれない。

英国のように、キスや抱擁といった身体接触的なコミュニケーションが、日常的に行なわれる文化の中では、子ども達の関係調整にもそれが頻繁に導入されるのだろうか。また一方では、マナーを重んじ、教育に熱心な文化でもある。あるいは個人主義的な文化であると同時に、児童中心主義に基づいた、より自由な交渉を奨励する保育活動がなされているのかもしれない。

他方、日本は、集団主義的であると同時に、いざごごについては、前述のような考え方に基づいて、保育園などではある程度奨励されるような状況である。また、日本の幼児は、友達同士であれば、子どもが自分たちでも仲直りをし、さらにその頻度は年齢によって増す (Fujisawa, Kutsukake, Hasegawa : 2005) という報告もある。これらの影響が、保育や、そこでの子ども達の行動にはどのように表れるのだろうか。

前述したように、日本の保育園とは就園年齢や保育システムが異なる。さらに、協力園との関係作りや、休暇時期の影響などから、日本での観察と厳密な比較ができるほどに観察スケジュールを統制したデータ収集は現段階では難しい。そこで、本研究では、英国の保育園での観察を予備的な観察と位置づけ、そこから違いを探索し、今後比較検討していくべき問題を生成することを目的としたい。

## 方 法

### **観察期間：**

英国：2005年8月19日、22～24日（合計観察時間：約6時間）

日本：2001年6月～2004年3月までの間（合計観察時間約90時間）。

### **観察対象：**

英国：E市内のGナーサリースクールに通園する3～5歳の合同クラスの園児12名（男児7名、女児5名）。上記の観察時間に加えて、Cナーサリースクールについては、保育の特徴を抽出するため、2名の保育士フォーカルの観察を行なった（2005年8月11日、12日、合計観察時間：約7時間）。

日本：T市内のA保育園の3歳児クラスと4歳児クラスの園児112名（男児52名、女児60名、3年間にわたって観察を行なったため、4歳児クラスには、前年度3歳児クラスからの進級児35名が含まれ、一部重複して計数されている）。

**観察手続き：**Cナーサリースクールについては、2名の保育士が子どもと関わる場面をデジタルビデオカメラで記録した。GナーサリースクールとA保育園では、自由遊び場面やおやつ場面を中心に降園までデジタルビデオカメラで記録した。対象クラス内で2名以上の集団を形成している子どもの相互交渉を中心に、いざごごの発生から終結までの記録を行なった。原則として同一対象の観察は1回あたり20分程度とするが、いざごごを記録している状況では、一連のいざごご収束を対象児変更の

基準とした。

#### 分析手順：

まず、分析1では英国のG、C2園の観察から得られた映像データによって、英国の保育活動の特徴を抽出した。分析2ではGナーサリースクールの園児から得られたいざごを含むエピソードの映像データから、調整・仲直り行動を分類し、広瀬（2006）による日本の園児の結果と比較した。さらにいざごの収束の様相を両国から得られたエピソードによって比較した。収集された映像データは、ビデオデータ質的分析支援ソフト mivurix（荒川，2002）を用いて分析を行った。mivurix による分析の手順は以下のとおりである。まず、対象とする映像を、デジタル化してコンピュータ内に蓄積した。その上で、デジタル化された映像について「カットアップ」と呼ばれる、タグ付けを行った。この作業を行なうことで、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Glaser & Strauss, 1967/1996）における「情報の断片化」と同様の処理が行われたことになる。次に切り取った映像に仮の名前をつけた。この作業はKJ法でいうところの「最初の見出し」と同様の位置づけとなる（荒川，2005）。さらに、タグ付けした映像を繰り返し視聴して分類をした。

本研究においては、保育士が子どもに働きかけている映像及び、いざごが含まれる映像を断片化して名前をつけ、調整・仲直り行動については、広瀬（2006）で生成されたカテゴリを用いて映像の分類を行った。

なお、この研究計画については、早稲田大学人間科学学術院倫理委員会の承認を得ている。

## 結果と考察

英国のGナーサリースクールの映像からは、19例のいざごとその終結場面が観察され、日本のA保育園の映像からは、90例のいざごと終結場面が観察された。

### 〈分析1〉

まず、英国の2園の保育活動の観察から得られた映像を、mivurixによってタグ付けを行った結果、16種類の場面にタグがつけられた。さらにまとめると、2園に共通した特徴がFigure 1のように浮かびあがった。つまり、①トラブルを起きにくくするシステムがあり、②トラブルが統制されやすい文化的背景があり、③トラブルが継続したり発展したりしにくい環境で保育が行なわれていることがわかったが、そのなかでも④大人と子どもの区別は明確にしつつも、親しみを持って接していることも同時に特徴としてあげられた。

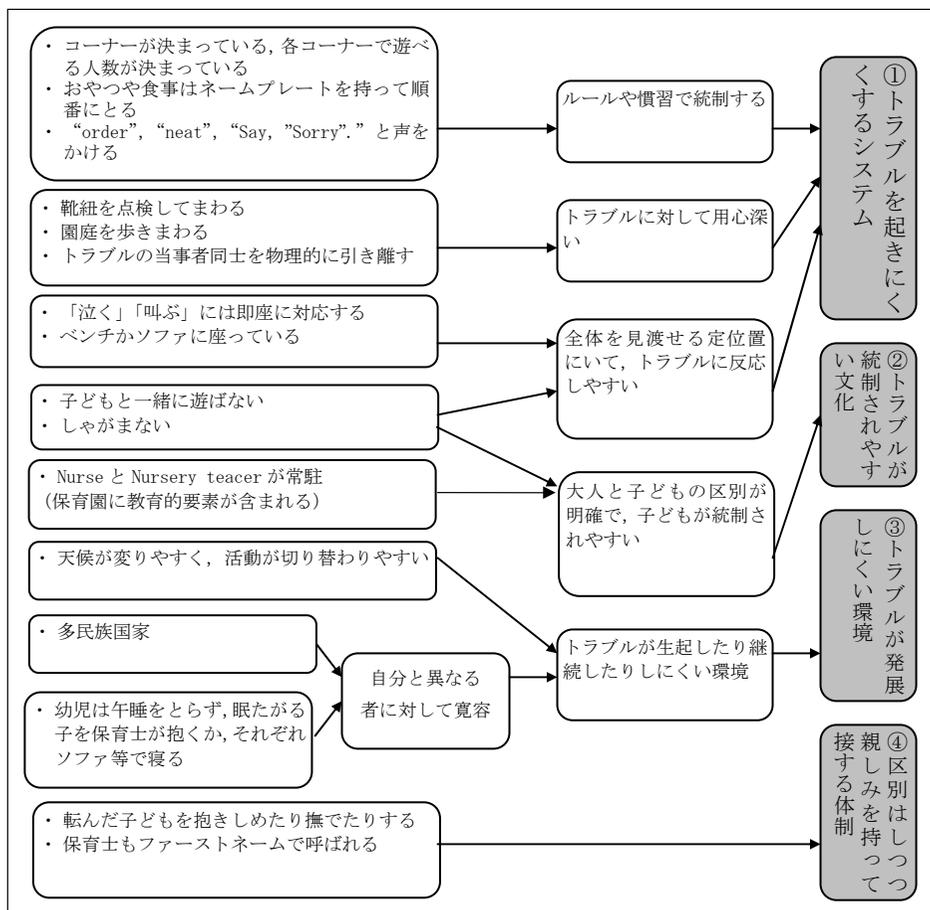


Figure 1 英国 Nursery School の保育の特徴と抽出過程

泣いたりぐずったりする子どもに対しては、抱きかかえたり、撫でたりするなど、慰撫的な身体接触を施しており、保育者と子どもの間での身体接触について特に制限する様子は見られなかった。しかし、幼児同士の相互交渉に対しては、保育者の目の届く範囲で発生したいざごぎについては、身体的な攻撃が見られる以前に、保育者が一方の手を引いて連れて行くなど、当事者同士を物理的に引き離す介入方法をとっていた。日本の保育園では攻撃行動がみられた場合に保育士の介入が多くなる（朝生・斉藤・荻野，1991）ことと比較して特徴的といえよう。

また、保育者は常に多くの子どもの状況を見渡せるような場所におり、トラブルには即座に介入できるように位置取りしていた。そのため、目の届く範囲内では身体的な相互交渉が発生したり継続したりしにくい環境にあると考えられる。全体的な大人の介入の割合も、日本の保育園と比較して有意な差はなかったが、日本では90例中23例と25%程度の介入率であったのに対し、英国では19例中9例と、半数に大人が介入していた。しかし、保育者の死角で発生したいざごぎでは、砂をかけたり、身体を押し合ったりといった激しいやり取りも観察されている。子ども自体に違いが現れているというより、大人の指導やかかわりや保育園のルールによって、いざごぎが当事者同士による収束の時点

まで継続されにくい環境になっているようだ。

## 〈分析2〉

### 1. 当事者同士の調整・仲直り

G ナーサリースクールの観察からは 19 例のエピソードが収集された。このエピソードの映像を mivurix を用いて切り取り、広瀬（2006）の調整・仲直り方略カテゴリを元に分類をおこなったところ、Table 1 のようになった。各方略については、同一エピソード内であっても、異なる方略が生じた場合にはそれぞれを計数したため、行動の生起数とエピソード数は一致しない。英国のナーサリースクールでは観察されなかった方略もあるが、今後観察時間を増やし、頻度等を検討して日本の園との比較する必要があるだろう。また英国の 19 例のうち、身体接触的なかわりを含む方略が見られたのは 2 例のみであった。前述したように、いざこざが発生した場合早い段階で保育士が介入する体制にあるため、いざこざ後に子どもが自発的に相手の子どもに働きかける機会が少なく、観察されにくかったと思われる。

Table 1 両園の調整・仲直り方略の分類

	G Nursery (英国)	A 保育園(日本)
譲歩	9	19
ルールの導入	0	4
謝罪	2	6
説明	0	15
代償	5	2
接近・合流	10	27
接近・合流の誘導	0	0
抗議	17	71
抵抗	11	20
おどけ	7	23
注意の転換	1	9
距離取り	4	5
介入要請	5	36
懇願	0	5
劣位性表出	8	23
	79	265

しかし、以下に示すような、保育士の介入によって引き離された後も、当事者同士が働きかけて協同的な遊びが開始された例も見られた。またこのエピソードは、身体接触的な関係調整も含んでいる。その様相を検討するため以下に、エピソード 1 を示す。

エピソード 1 (G ナーサリースクール 4 歳児)

女兒 F が使っていたダンボールに男児 J が入った。一度ふたを閉め、開けると J が “Wh-y, (did ) you open? ! ( どうして開けちゃうの? ) … ( 開き取れず ) ” と言ったが、J は箱からは出ず、F は一度箱から離れた。戻ってきた F は一旦 J の頭の上にふたを閉めるが、すぐに開けて、J に外に出るように手で促した。J は箱の中で、ふたをしめられたときと同じ姿勢でかがんでいた。F が泣きべそをかき始めると、J が箱から出て、F を箱の中にいれ、ふたを閉めた。F は泣きべそをかき続けていた。保育士が J に声をかけた “J ! F don’ t like to do so ( F は嫌みたいよ ) ” 。箱の中で F が叫び、J はふたを開け、F の顔をのぞきこみながら、顔に頬を寄せた。手を F の肩に伸ばしかけたところで保育士が “Excuse me ! Don’ t ( ダメよ ) ” と声をかけながら近づくと、J は手を引っ込めた。保育士が F の手を引き、箱から出した。J は F の方を見ながら、お迎えについてきた年長の男児に近づいていった。数秒後、F はうつむきながら別の段ボール箱を蹴飛ばしたり、箱の周りを走ったりしていたが、約 15 秒後、滑り台の上の J に近づき、J の腹に後ろ向きで自分の背中を押し付け密着させた。F は滑り台を一度駆け下り、再び J のところに駆け上がった。J と F は顔を見合わせて笑い、一緒に滑り台で遊び始めた。

この日、園庭には子どもが入れる程度の大きさの段ボール箱が置いてあり、その中に入って遊ぶことが子ども達のあいだで人気があるようだった。そのためか、他にもこのダンボール箱を巡るいざこざが 1 例起こっていた。上記のエピソードでは、段ボール箱の使用をめぐるいざこざが発生し、箱をめぐるのやり取りは保育士の介入によって中断された。さらに J の注意が他の子どもに向き、二人の間のやり取りは一旦消失した。しかし F はその後も他の段ボール箱を蹴飛ばし続け、やり取りに納得していない様子だった。ところが F が J に近づき、身体を一度密着させた ( 下線部 ) 後には、微笑み合ったり、一緒に同じ遊びをしたりできるようになっている。一度距離が取られたことで、緊張が緩和されたことも機能しているであろうが、F が接近し、接触したことが効果を発揮したと考えられる。

次に、日本の園での 4 歳児同士のエピソード 2 を示す。大縄跳びをしている際に起きたいざこざと、その解決の過程が含まれている。

エピソード 2 (A 保育園 4 歳児)

大縄跳びに並ぶ列で、女兒 B 子が女兒 A 子と手をつなごうとしているが、A 子は手を振りほどいた。B 子は再度 A 子の手をとり、A 子は不満げな顔をしてされるままになっていた。縄を飛ばうとする A 子に、B 子が身体を寄せてついていき、手を持って一緒に飛ばうとした。A 子は 「やめて」と言いながら逃げ回ったが、B 子は執拗に追い回した。A 子は 「やあだ ! 、一緒にやりたくないのー」と言い、スカートを握り締めながら泣きべそをかいた。縄をまわしていた保育士が 「B 子、やだって。一回はさー、自分でひとりでやりたいんだって。B 子はもういっぱい一人で飛んだけど、A 子は今来たんだ

から、いっぱい飛んでから一緒にやればいいじゃん」と言った。B子は「じゃあ一回だけね」と言い、A子から離れた。B子が先に縄を飛び、続いてA子が一人で飛んだ。A子は飛び終わると、列の最後尾に並んでいたB子のところに歩いて行き、B子と手をつないだ。その後二人は手をつないだまま列に並んでいた。

これはA子とB子の間の、意図と要求のズレで生じたいざござである。列に並んでいた段階でB子が執拗にA子の手をとろうとしていたことによって、A子に不満が残り、2度目に接近されたときには泣きべそとなってあらわれたようだ。保育士がA子の気持ちを代弁し、解決法を提案し、B子が譲歩したことで一旦やりとりは中断された。A子も自分の希望通りに、一人で飛ぶことができたためか、B子に対する怒りは緩和されたようである。さらにB子に接近して自分から手をつなぐことで、仲直りを提案している。B子も、その後も手をつなぎ続けていることから、A子の提案を受け入れたようである。

以上のように、両エピソードとも、保育士の介入によって攻撃的なやりとりは中断されているが、その後の一緒に遊ぶことについては、子どもの能動的な働きかけによって開始されている。どちらの園の子どもも、接近し接触することを、仲直りの提案として受け入れ、関係調整がされていると考えられる。

## 2. 他児介入の調整・仲直り

次に、当事者以外の子どものかかわり方の違いをエピソードで比較する。他児が介入する割合は両園に違いは見られなかった。しかし介入の仕方に違いが見られたため、以下に日本の介入のエピソード3、英国の介入のエピソード4を示す。

### エピソード3 (A 保育園 4 歳児)

園庭で砂遊びをしていると、女兒N子が男児T夫の遊んでいたところから砂を取り、T夫が「N子！」と抗議した。N子は「一緒に遊んでいたM子とN美に「もうT夫と遊ばないようにしよう」と言った。N子は再びT夫のいるところから砂をとった。T夫が再度N子と他の女兒二人が遊んでいる場所に近づいた。T夫が近づいたのに気づくとN子は、「はいるな！」と叫んだ。T夫はN子を突き飛ばし、N子が地面にしりもちをついた。N子はしりもちをついたまま泣きだした。N美はN子の顔を覗きこみ、M子はN子の頭を撫でた。①M子はT夫のところへ向かって走りながら強い口調で、「ごめんね言いなよ！」と言った。②「N子がね、いたずらしたのがやだったの」と言いながらT夫は観察者に近づいてきた。N美がT夫の手を引っ張り、「ごめんね言いなよ」とN子のところにひっぱっていき、謝らせた。③

エピソード3では、当事者でないN美とM子がN子を慰めたり、T夫に謝罪をさせたりすることでいざござの解決に介入している。ただし、撫でて慰める(下線部①)のは一方に対してのみであり、謝罪を要求する(下線部②, ③)のも、T夫一方にのみである。身体接触を、関係調整というよりは、自分が味方する、あるいはダメージを受けたと思われる一方に対しての慰撫として用いている。また介入の仕方も、一方を慰め、他方を非難するという、一方的な介入方法をとっている。

エピソード 4 (G ナーサリースクール 4 歳児)

ままごとコーナー (人数が決められている) に入ろうとした女児 F を男児 B が、F の耳元で鈴を鳴らしながら追いかけた (人数超過のため)。逃げ回りながら F が泣きだした。保育士が “What’s happening? (どうしたの?)” と声をかけると、F は泣きながら B を指差し、“B tell me waaaaa. . . . . (泣き出し、言葉にならなくなる)” と泣き続けた (そばで男児 J が二人を見ている)。保育士が “B, tell her “Please” (F に「どうぞ」って言いなさい)” と声をかけた (F は泣き続けている)。J は B に向かって “Say “Sorry” (謝って)” と言った。① B は F に近づき、顔の近くで小さな声で “Sorry” と言った。J は B の肩を抱き、“Hug her (F を抱きしめて)” と促した。② B は F に近づき、肩を抱くと、F は泣き止んだ。J は “And, kiss her! (F にキスして)” と言い、B は再度 F の肩を抱き、顔を近づけた。さらに、J が両手を広げて F と B に近づくと F は J の方に近づいた。J は F を抱きしめた。③ 続いて J は F から離れ、B に近づき、肩を抱いた。④ 笑いながら J が B の肩を抱くと B も笑った。二人を見て F も笑い始めた。

一方で、英国で見られたエピソード 4 では、F と B のいざこざをそばで見ている J は、B に対して “Say “Sorry” (下線部①)” と謝罪を要求する内容の発話をしながらも、エピソード 2 のような、もう一方を攻撃するような立ち位置はとっていない。B に対してハグやキスを促し (下線部②) つつ、自分も双方をハグし (下線部③、④) て双方の笑いを引き出すなど、中立的である。つまり、身体接触を解決のきっかけとして提案するとともに、自分自身も双方に提供し、双方の気持ちを沈静化することに用いているのである。

以上のように、同じ年齢で、男女が含まれたエピソード同士でも、当事者以外の介入の仕方には日英間で違いが見られた。さらに英国での観察データを収集し、精緻な比較をする必要があるだろう。

## まとめ

本研究は、保育の日英比較を行うにあたり英国のあるナーサリースクールの園児と保育者を自然状態で観察し、保育活動や園児達の相互交渉の特徴を抽出し、検討すべき問題を発見することを目的に行なわれた。

観察を行った英国の園では、大人と子どもとの区別を明確にし、細かいルールを設定したりするなどトラブルを防止する体制をとってもおり、そのため大人の統制により、子ども達自身の積極的な調整や身体的なかかわりは発生しにくい様子が伺われた。保育者の介入の仕方や、日常的な統制によって、子ども同士の相互交渉の様相も異なってくるのが推察された。ただし、観察された子ども同士での関係調整の場面では、日本の子どもたちの中でも見られるような方略が用いられたり、身体接触によって遊びを再開したりする様子も観察された。したがって子どもたちの方略自体には違いはあまりないことも推察された。

しかし一方で、当事者以外の子どもがいざこざの解決に介入する場合には、エピソードを比較すると様相が異なることが推察された。日本の保育園児のエピソードでは、どちらか一方の味方につくような介入の仕方であった。一方、英国の園児のエピソードでは、双方を慰めるという、中立的かつ、

大人びた介入方法であった。英国では、大人が積極的に園児のいざごに介入し、解決方法を指示することが多かった。このことにより、園児達が、大人の望む解決方法を感じ取る機会や、また大人を取る解決場面を観察する機会が増えることが推察される。その結果、自分が当事者でない場面では大人の用いる方略を導入できるようになっているのと考えられる。

日本では、いざごやその解決が社会性の解決に役立つという考え方が広まり、スキル訓練の場が与えられ、仲間同士で鍛えあう環境が整ってきている。ただしその結果、鍛えあう相手も、観察する相手も年齢の近い子どもである場合が増えているとも言えるだろう。一方英国のナーサリースクールでは、大人が積極的に介入することで、子ども同士でスキルを鍛えあう機会は少ないながら、大人のやり方を観察する機会は多く与えられている。また、前述したように、英国のナーサリースクールでは大人と子どもの区別が明確であり、大人には従うべき、大人のやり方は見習うべきという意識も子どもの間で明確になっていると推察される。

今後は、このような相違点が子ども達にどの程度表れているのか、また保育システムの違いがどのように子ども達の方略に影響するのかを検討するため、実験的なセッティングによって両国を比較する必要もある。さらに、幼児教育のスタイルや大人のかかわりの違いが、子どもたちの社会的なスキルにどう影響するのかを検討していかなくてはならないだろう。子どもの発達に必要な援助はしつつも、自由な育ちや学びの機会は奪わない良好な環境を提供するためにも、今後さらに子どもの社会的行動やスキルにかかわる検討が求められる。

## 文 献

- 秋元美世 (1987) 児童福祉サービス 社会保障研究所編 社会保障研究所研究叢書 18 : イギリスの社会保障 (pp303-322) 東京 : 東京大学出版会.
- 荒川歩 (2002) Mivurix. <http://www.k2dion.ne.jp/~kokoro/mivurix/> (情報取得 2003/5/3) .
- 荒川歩 (2005) 映像データの質的分析の可能性 質的心理学研究, 4, 66-74.
- Argyle, M, (1988) *Bodily Communication* (2<sup>nd</sup> ed.) London : Methuen.
- 朝生あけみ・斉藤こずゑ・荻野美佐子 (1991) 0~1 歳児クラスのいざごにおける保母の介入の変化 山形大学紀要, 10 (2), pp. 217-228.
- De Waal, F.B.M, (1993) 仲直り戦術 : 霊長類は平和な暮らしをどのように実現しているか (西田利貞・榎本知郎, 訳) 東京 : どうぶつ社 (De Waal, F. B. M (1989) *Peacemaking among primates* London : Penguin Books) .
- Directgov web-site Education and Learning Preschool Learning <http://www.direct.gov.uk/en/EducationAndLearning/PreschoolLearning/index.htm>. (情報取得 2007/4/1) .
- Fujisawa, K., Kutsukake, N., & Hasegawa T, (2005) Reconciliation Pattern After Agression Among Japanese Preschool Children. *Aggressive Behavior*, 31, 138-152.
- Glaser, B.G., & Strauss, A.L, (1996) データ対話型理論の発見 : 調査からいかに理論をうみだすか (後藤隆・大出春江・水野節夫, 訳) 東京 : 新曜社 (Glaser, B.G & Strauss, A.L (1967) *The discovery*

- of grounded theory : strategies for qualitative research. Chicago : Aldin) .
- 広瀬美和 (2004) 子どもの調整・仲直り行動の発達の研究 : 保育園での自然観察的研究 早稲田大学大学院修士論文.
- 広瀬美和 (2006) 子どもの調整・仲直り行動の構造 : 保育園でのいざこざ場面の自然観察的検討 乳幼児教育学研究 15, pp13-23.
- Klaus, M.H., & Kennel, K.H. (1982) Parent-infant bonding, 竹内徹・柏木哲夫・横尾京子 (訳), 親と子のきずな 東京 : 医学書院.
- 小山高正 (2003) 遊び・ケンカ 根ヶ山光一, 川野健治 (編著) 身体から発達を問う : 衣食住のなかのからだどころ (pp218-220) 東京 : 新曜社.
- Morris, D. (1971) Intimate behavior. Jonathan Cape (石川弘義 (訳), ふれあい 愛のコミュニケーション 東京 : 平凡社) .
- 根ヶ山光一 (2002) 発達行動学の視座 - 〈個〉の自立発達の人間科学的探求 東京 : 金子書房.
- 荻野美佐子 (1986) 低年齢児集団保育における子ども間関係の形成 無藤隆・内田伸子・斉藤こずゑ (編), 子ども時代を豊かに (pp.18-58) 東京 : 学文社.
- Sackin, S., & Thelen, E. (1984) An Ethological study of peaceful associative outcomes to conflict in preschool children. Child Development, 55, 1098-1102.
- Shantz, C.U. (1987) Conflict between children. Child Development, 58, 283-305.
- Smith, P. K., (1997) Play fighting and real fighting : Perspectives on their relationship In : A Schmitt et al (Eds.) . New Aspects of Human Ethology. New York Plenum Press.
- 菅野幸恵 (2003) 触れる・離れる 根ヶ山光一, 川野健治 (編著) 身体から発達を問う : 衣食住のなかのからだどころ (pp141-154) 東京 : 新曜社.
- 鈴木晶夫 (1995) 身体と子別れ 根ヶ山光一・鈴木晶夫 (編著), 子別れの心理学 東京 : 福村出版.
- 山口創 (2003) 乳児期における母子の身体接触が将来の攻撃性に及ぼす影響 健康心理学研究.16, (2)60-67.
- 山口創 (2004) 子供の「脳」は肌にある 東京 : 光文社.

## 【注】

<sup>1</sup> 秋元 (1987), Directgov web-site をもとに整理。

## 付 記

本研究は早稲田大学人間科学学術院根ヶ山光一教授を研究代表とする, Edinburgh 大学 Colwyn Trevarthen 教授, Niki Powers 氏, 共立女子大学河原紀子講師との日英の保育に関する共同研究プロジェクトの一環として, 同先生方の指導と援助を受けて行なわれた。また文部科学省科学研究費補助対象研究「対人関係の基盤としての「身体接触」に関する生涯発達行動学的検討 (研究代表 : 根ヶ山光一, 平成 16 年度~18 年度)」からも一部援助を受けている。現在も日英両国についての調査とデ

一タの蓄積が進められている。

